



👁️👁️ みどころ

原題も邦題も『なまず』とする本作の主人公は、病院の水槽内で悠々と泳ぐなまず？もし、このなまずが一旦暴れたら・・・？1987年生まれの韓国期待の女性監督は、長編デビュー作になぜそんなタイトルを？

職場（病院）内セックスがレントゲン撮影されたら？それが職場で出回ったら？そんなバカげた設定で始まる本作の主人公はもちろんなまずではなく、若き男女だが、このストーリーは一体ナニ？次々と展開していく、ワケのわからんハチャメチャな物語は、ホントのようでもあり、ウソのようでもあり・・・？

若き才能の評価は難しいが、私はチャン・イーモウ（張藝謀）監督の名作『活きる』（94年）を彷彿させる（？）“この手の映画”は大好き。こりゃ、必見！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■この女性監督に注目！韓国ニューウェーブの大本命！■□■

近時の韓国映画では、ポン・ジュノやホン・サンス等の“巨匠”も元気だが、若手女性監督も元気。それは『夏時間』（19年）（『シネマ48』247頁）のユン・ダンビ監督や、『チャンシルさんには福が多いね』（19年）（『シネマ48』251頁）のキム・チョヒ監督等に顕著だ。

他方、2019年の第14回大阪アジア映画祭で見事グランプリに輝いたのが、1987年生まれの女性監督、イ・オクソプの長編監督初作品となった本作だ。本作は第23回釜山国際映画祭でも4部門受賞しているから、大阪アジア映画祭でのグランプリ受賞はある意味当然かもしれないが、そんな注目作が2022年の今、やっと日本で公開！こりゃ、必見！

■□■この邦題はナニ？原題は？英題は？テーマは？■□■

本作の邦題は『なまず』。原題の『메기』も Weblio 翻訳で調べてみると「鯰」。これを、

さらに漢字ペディアで調べると＝「なまず」だ。しかし、こりゃ一体ナニ？「なまず」と聞いて思い浮かぶのは、まず、あの愛嬌のある大きな口と、長く伸びた髭、そして、図体の大きさだが、それに続いて連想するのが地震との関係。はっきり言えば、「なまず」には地震発生の予知能力があるのでは？という問題だ。これは単なる迷信ではなく、それなりの科学的根拠もあるらしい。

しかし、韓国の若手女性監督は自身の長編デビュー作になぜそんなタイトルをつけたの？ちなみに、「なまず」の英語表記は「Catfish」だが、本作の英題は『Catfish』ではなく『Maggie』。これは女性の名前で、マーガレットの愛称とされている。すると、ストーリー中で展開していく物語を病院の水槽からじっと見つめる本作の重要キャラクター(?)である、なまずの名前が「Maggie」？すると、ひょっとして私はそれを見逃したの・・・？

本作のパンフレットには勝呂尚之氏(専門研究員・農学博士)のコラム「地震を起こす魚?～ナマズの生態～」がある。しかし、チラシに「なまずが空を飛んだ日、巨大な穴が現れた! ?半径0.5mの恋愛群像劇。」と書いてある通り、本作は決してなまずの生態に注目して作った映画ではないから、そんなコラムは不要では・・・？

■□■冒頭の設定はチョー大胆!チョー異例!■□■

1970年代に一世を風靡した日活ロマンポルノは、“シリアスもの”から“コメディもの”までバラエティ豊かだった。その中には当然“オフィス内セックス”バージョンもたくさんあった。また、“過激度”が増していくにつれて“本番モノ”が生まれ、やがてはAVアダルト・ビデオ路線に・・・？

1987年生まれのエ・オクソプ監督がそれを知っているはずはないが、本作冒頭はソウル郊外にあるマリアの愛病院内での“病院内セックス”がレントゲン撮影されるという、日活ロマンポルノでも1度も取り上げられることのなかった前代未聞の事件から始まる。誰もが知っている通り、レントゲン室は撮影時、関係者以外立ち入り禁止だが、そのレントゲン写真に生々しく映っている(?)男女は、紛れもなく看護師のヨ・ユニョン(イ・ジュヨン)とその恋人のソンウォン(ク・ギョファン)! ?本作は犯人探しのサスペンス映画、スリラー映画ではなく、恋愛青春群像劇。したがって、本作では冒頭からそんなヘマをやらせた男女が、上記の2人であることが堂々と明示される。もっとも、それが“永遠の闇”として葬り去られれば問題なしだが、問題は、そのレントゲン写真が瞬く間に病院内に広まったこと。そして、その話題の中心は、「盗撮犯は誰か?」ではなく、「レントゲン写真に映っている男女は誰?」という興味本位のものになったから、さあ大変だ。

そこで2人は相談の上、仕方なく退職届を準備し、ユニョンが副院長のイ・ギョンジン(ムン・ソリ)に相談するところから、本作最初のハイライトが登場する。副院長はユニョンを優しく慰めるかと思いきや、スクリーン上にはその正反対に、ユニョンに対して厳しく“自宅待機”を命じるシークエンスになるから、アレレ?そんな理不尽な扱いに“反発”したユニョンは、辞めるのを止めることにしたが、そんなことがホントに可能なの?

■□■なまずは何を見ているの？なまずの声は誰？■□■

安倍元総理の銃撃事件1つを挙げても、今ドキの若者は何を考えているのかさっぱり分からない。それと同じように(?)、本作は冒頭からホントのようなウソのような、わかったようなわからないようなストーリーが次々と登場していくからそれに注目！さらに、前述したユニョンとギョンジン副院長との一連の間答を経た後、おもむろに「申し遅れましたが私、なまずと申します。」と語られるが、その声の主を『オアシス』(02年)『シネマ7』177頁)で有名になった女優、チョン・ウヒが担当するので、そんな“おふざけ(?)”にも注目！

ここで「ええ、なまずが人間の言葉を喋るの？」などと馬鹿げた質問をしてはダメ。本作は1987年生まれのエ・オクソプ監督の豊かな感性に基づいて描かれた青春群像劇だから、まさに何でもあり！したがって、「それをずっと見守っているのが水槽で飼われている1匹のなまずでした」という設定にも、なるほど、なるほど……。しかも、そのなまずの声のナレーションを有名女優、チョン・ウヒが担当するのだから、ハチャメチャな展開を含め、とにかくなんでもあり！

こりゃ、きつとどこかでなまずが暴れるシーンが登場し、その後ソウルがそして韓国中が大地震に！そう思ったが、それは半分的中し、半分外れることになるので、それに注目！

■□■穴に落ちたら、どうする？どうすべき？■□■

中国語を勉強していると、いろいろな知識を身につけることができる。とりわけ、四字熟語には興味深いものが多い。しかし、あなたは「打落水狗」を知っている？これは白水社中国語辞典によると、「水に落ちた犬を打て」で、「窮地に陥っているものを追い討つ」という意味だ。その語源は、中国の文芸家、魯迅の評論の中にあり、元の「水に落ちた犬を打つな(不打落水狗)」という言葉を一ひっくり返して作った言葉だ。

このように、四字熟語からは多くの教え(教訓)を学ぶことができるが、本作導入部では「穴に落ちた時にやるべきことは、掘り進むことではない。そこから抜け出すことだ。」の教えが登場するので、それに注目！ちなみに、本作の冒頭では「宇宙船に乗らずに宇宙に行く方法は？」「それはレントゲン室で働くことです。」の間答が流れた後に、ユニョンとソンウォンによる「職場内セックス」が登場するが、穴に落ちた時のナレーションが流れるのは、ユニョンとソンウォンが話し合っている、ある場所、あるシチュエーションの時だから、それにも注目！このように、本作ではさまざまな「結節点」(?)で、なまずが語るさまざまな教訓(?)が登場するので、若きエ・オクソプ監督の博識ぶりとともに、その教訓の中身にも注目！

■□■何がホントで、何がウソ？何を信じればいいのか■□■

副院長の理不尽な対応に怒ったユニョンは、それと断固戦うべく自宅待機通告の翌日、それを無視して意気揚々と職場に出かけたが、その日は、なぜかユニョンと副院長以外全員欠勤。その理由は全員“体調不良”だが、そんな馬鹿なことがあるの？副院長は職員た

ちの嘘に失望していたが、ユニョンは「本当に嘘なのかをこの目で確かめましょう」と説得し、コトの真偽を探るべく、ある医師の自宅を訪れると・・・。

そう、何がホントで、何がウソかは、それほど単純ではないのだ。コロナ禍が3年間も続く現在ならば、“全員欠勤”も“なるほど”と納得できるはず。すると、あの時、マリアの愛病院で起きた“全員欠勤”を嘘だと決めつけるのは大間違い！？やっぱり人間は信じなければ・・・。

他方、ユニョンの恋人であるソンウォンが、職場を失った後、大事な指輪を失ったことの説明を聞いていると・・・？さらに、ユニョンがソンウォンの元彼女であるジョンに呼び出されて、彼の黒い過去を聞かされると・・・？一体、何がホントで、何がウソ？何を信じたいいの？

そんな状況下、ユニョンの目の前の道路で大穴が開き、ソンウォンがそのシンクホールの中に落ちてしまうと・・・？

■□■このワケのわからんハチャメチャな韓国映画、大好き！■□■

中国の四文字熟語には、「人間万事塞翁が馬」、「禍福は糾える縄の如し」がある。これは“人生論”の本質をついた四文字熟語で、それを映画にしたのが、チャン・イーモウ（張藝謀）監督の傑作中の傑作『活きる』（94年）（『シネマ5』111頁）だ。本作は、それとは全く異質だが、何がホント？何がウソ？そんなテーマを次々と突きつけながら、ヒロインのユニョンや観客たちにその選択を迫っていく面白さがある。若き恋人同士のソンウォンとユニョンの仲は、冒頭の“病院内セックスシーン”を見れば一見順調そうだが、退職届を準備するくだりや、ソンウォンが職を失った後、なまが暴れ出したおかげで韓国各地に起きたシンクホール出現事件と、それに対する政府の埋め戻し工事策によって職にありつく姿を見ていると、彼は何とも頼りない、今ドキの若者（に過ぎない）ことがよくわかる。したがって、そんなソンウォンが語る、失った指輪の話や元カノの話など嘘っぱちに決まっている・・・？

他方、当初あれほど冷酷だった副院長とユニョンとの間には、総員欠勤の中での共同作業の中で、互いにある“信頼関係”が生まれることに。この人なら相談してよさそう！この人なら信じてよさそう！しかし、そんなことが1987年生まれのエ・オクソプ監督にホントにわかるの？いやいや、わかっているのは水槽の中で静かに泳いでいるなまがだけ？しかし、もし、このなまが再び水槽内で暴れ出したら・・・？

そんなワケのわからんハチャメチャな最新の韓国映画たる本作、私は大好き！

2022（令和4）年8月18日記

「なまず」(韓国映画・2018年)

洋2022-99 ★★★★★

<シネ・リーブル梅田>

2022(令和4)年8月16日鑑賞

2022(令和4)年8月18日記

監督・脚本:イ・オクソプ

出演:

ヨ・ユニョン(看護師) / イ・ジュヨン

ソンウオン(ユニョンの恋人) / ク・ギョファン

イ・ギョンジン(マリアの愛病院の副院長) / ムン・ソリ

なまず(声) / チョン・ウヒ

配給: JAIHO / 89分